杏林医会誌　41 巻 1 号　2010 年 4 月

巻 頭 言

杏林大学学長　　跡　見　　裕

今日，様々な分野で PDCA サイクルの展開の重要性が指摘されています。PDCA とは，実行計画の立案 (PLAN)，実施 (DO) 実施した結果の検証 (CHECK)，更なる改善 (ACTION) の頭文字をとったものであり，このサイクルを機能的に回転させることが，更なる事業の継続・発展には不可欠なのです。杏林大学の中期計画検討委員会からの提言でも，PDCA サイクルの推進がうたわれています。

確かに新規事業を立ち上げるさい，多くの場合 PDCA は実施計画に示されるようになってきました。しかし, ともすれば忘れられがちなのは, 継続している事業での PDCA ではないでしょうか。もっとも，忘れているのではなく，具体的な検証が難しい場合が少なくないことも，PDCA サイクルを機能しづらくしている大きな理由のひとつかもしれません。

学会誌の場合もなかなか評価が難しい分野です。例えば英文誌ですと，impact factor がよく評価に用いられています。多くの editor 達が，自分の雑誌の impact factor に一喜一憂するのは，これが雑誌の評価に直結する（と信じられている）からです。一方，邦文学会誌ではこのような明快な評価基準はありません。投稿論文数，掲載論文数の多寡も雑誌の評価をあらわすものですが，単に量は質を規定するともいえません。

翻って杏林医学会誌はどうでしょうか。内容的には興味深い論文が沢山掲載されています。これを一層充実したものとするためには，PDCA サイクルを回転させる必要があります。今後の発展のためにも，関係者の皆様の一層のご努力を願ってやみません。